

研究主題

伸ばす学力、ひらく未来、かどがわ“学び”の創造 ～ 学力向上^ツ2プランを生かした学習指導を通して ～

主題設定の理由

今日的な課題から

今日の社会は、急激に変動しており、若者にとって将来の見通しがもてない状況にある。景気の問題や雇用の多様化・流動化、深刻な少子高齢化問題など、ネガティブな情報が非常に多く、若者は将来に不安を感じ、前向きな生き方が難しくなっている。また、精神的・社会的な自立の遅れなど、若者を取り巻く多くの課題も指摘されている。このような状況の中、将来を担う子ども達に今最も求められていることは、このような社会の激しい変化に流されることなく、様々な課題にたくましく対応し、社会人として明るい展望をもって自立するために必要な「生きる力」を身につけることである。

地域の課題から

このような社会情勢の中、門川町教育委員会は本年度最重点教育施策として、基礎・基本的な生活習慣の確立を図りながら、“生きる力をはぐくむための「確かな学力の向上」の推進”をあげており、学校教育が果たす役割は大きい。この目標実現のためには、学校や関係組織が一体となって教育に取り組む必要があり、何よりも小・中学校9年間の教育をとおして、知・徳・体の調和の取れた成長を図りながら、「生きる力」の基盤である「確かな学力の向上」の推進に努める必要がある。

これまでの研究から

昨年度は、「確かな学力」を育てるために、定着確認のための小テストを取り入れた「門川ならではの授業プラン」を創造する研究や基礎・基本の定着を図るためのドリル学習の効果的な指導の研究に取り組み、実態調査や検証授業をとおして、「かどがわ5段階授業プラン」や「ドリル学習実践の手引き」、「かどがわパワーアップドリル」などを作成することができた。これらの研究成果は、すべての学校に教育研修資料として提供するとともに、教育研究所便り「ふれあい」をとおして、日常生活と学習を関連づけた様々な情報を家庭や地域社会に発信することができた。しかし、学校と関係組織の連携や一体となって学力向上に取り組むための体制づくりが十分ではなく、教育研究所が提唱する「小テストやドリル学習の共通実践」には、一層の工夫と努力が必要であることが明らかになった。また、門川町の児童生徒の状況も、学習への意欲や進路への意識はあるものの、基礎的・基本的な知識・理解が十分身につけているとは言えず、全体に伸び悩んでいる姿が見られる。

本年度の研究について

そこで本年度は、「伸ばす学力、ひらく未来、かどがわ“学び”の創造」の研究主題のもと、門川らしい「学び」を創造することをとおして、「確かな学力の向上」に取り組むことにした。そのために、これまでの課題であった関係組織や学校との一体化を図る体制をつくり、昨年度の研究をもとにした「学力向上^ツ2プラン」を生かした学習指導の研究・実践に取り組むたい。プラン1は、小テストなどでの定着確認と習熟度に応じた指導の研究・実践、プラン2は、ドリル学習の確実な実施と効果的な指導の研究・実践に取り組み、その成果を情報発信して、「確かな学力向上」の推進に努めたい。

このような、「学力向上^ツ2プラン」を生かした学習指導の研究・実践をとおして、学校や関係組織が一体となって学び合い、知恵を出し合って、“生きる力をはぐくむための「確かな学力の向上」の推進”に取り組めば、自らの未来をきりひらく「生きる力」の育成を図ることができるのではないかと考え、本主題を設定した。

研究目標

子ども一人一人の豊かな未来をきりひろくために、その原動力である「確かな学力」を伸ばすことを目指して、学校や関係組織が一体となって学力向上^ツプランを生かした学習指導に取り組み、かどがわならではの“学び”を創造する。

研究仮説

プラン1 仮説

学習内容についての理解や定着確認を確実にに行い、習熟度に応じた学習指導を工夫すれば、基礎・基本が身につくとともに、自らの“学び”を育てることができるであろう。

プラン2 仮説

日常活動の中において、ドリル学習で鍛える場を設定し、指導の在り方を工夫すれば、基礎・基本が身につくとともに、自らの“学び”を育てることができるであろう。

研究構想

1 研究方法

教育研究

研究1 定着確認と習熟度に応じた指導の研究（プラン1）

実態調査の実施と検討

授業実践による検証

指導モデルの研究・作成（国語・算数・社会）

研究2 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究（プラン2）

実態調査の実施と検討

各校による実践例の研究

情報発信

学習指導に役立つ情報発信

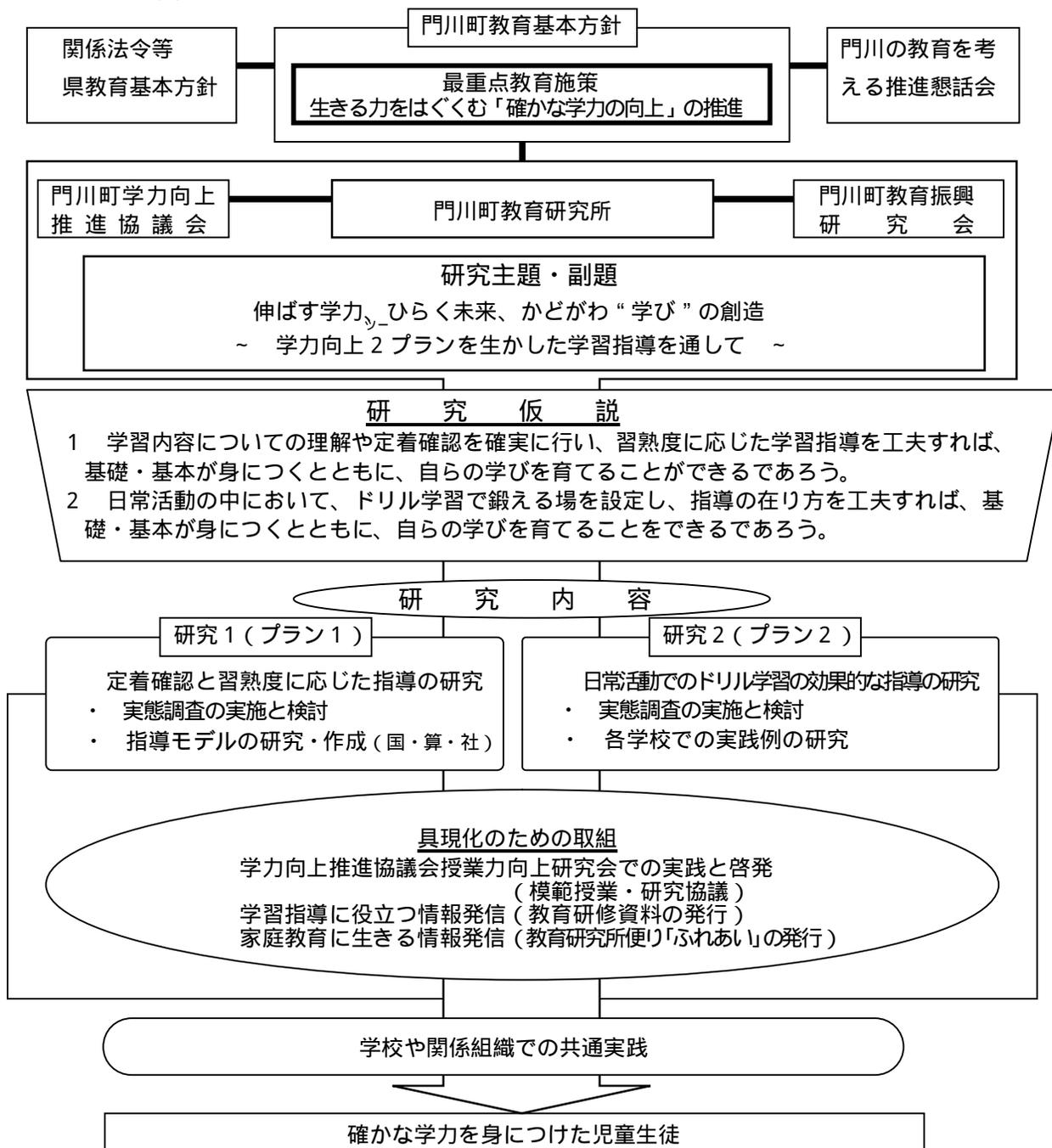
家庭教育に生きる情報発信

教育研究所便り「ふれあい」、研修資料、ホームページ運営をとおして情報を発信する。

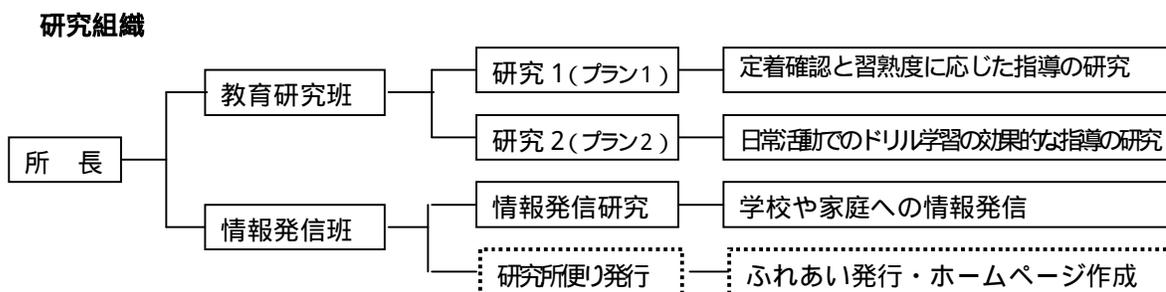
2 研究計画

分野	研究内容	平成22年度	備考
研究1	定着確認と習熟度に応じた指導の研究	実態調査の実施と検討 授業実践による検証 指導モデルの研究・作成	7月・10月・2月の授業検証をとおして、授業モデルをつくりあげる。
研究2	日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究	実態調査の実施と検討 各学校の実践例の研究	実態調査をもとにして、各学校の実践例等を研究して情報発信する。
情報発信	家庭や学校への情報提供	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">啓発・研修資料の発行</div> 	

3 研究全体構想



【図1】 【研究全体構想図】



【図2】 【研究組織】

研究内容

1 学校や関係組織との連携

(1) 実践・研究の体制

昨年度の研究の成果をふまえて、本年度を実践化の年と位置づけ、研究・実践に取り組んだ。

まず、研究1をプラン1、研究2をプラン2として、「学力向上2プラン」と命名し、実践化を推進するための体制づくりに取り組んだ。

そのために、授業力向上の研究授業を研究員が担当して、「学力向上2プラン」の啓発・普及を図り、すべての学校での実践化をめざすことにした。

(2) 実践・研究の計画

授業力向上のための授業研究会を年3回位置づけ、算数・社会・国語と、それぞれ異なる教科で、「2プラン」の普及を図るようにした。また、「2プラン」の確かな理解と定着を図るために、

「2プラン」の趣旨を説明する文書と指導案を事前に配布する。

授業前に、授業・研究の視点を説明する。

研究会の中で、研究員が「2プラン」を説明する。

参加者全体で「2プラン」実践の工夫等を話し合う。

といった、実践化の工夫を行うようにした。

(3) 実践・研究の実際

これまで実施した2回の研究授業・事後研究会（算数・社会）には、それぞれ約30名、全体で約60名以上の教職員が参加し、熱心に研究に取り組むことができた。

この研究会をとおして、プラン1については、

効果的な定着確認の工夫をする必要がある。

習熟度に応じた、効果的な指導法が必要である。

ということが共通理解された。

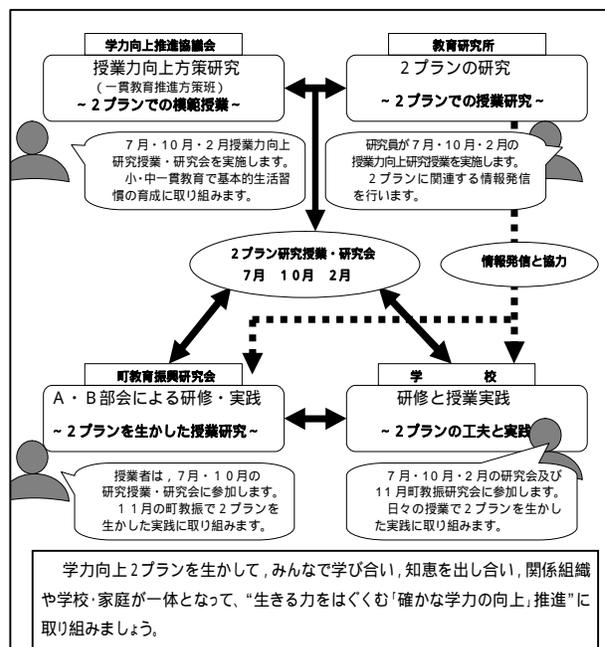
また、プラン2については、

すべての学校でドリル学習に取り組む。

学校・学年単位で効果的なドリル学習を工夫する。

ということが確認された。

研究授業での具体的な指導法の研修や研究会での、日常実践をふまえた研究・協議により、「学力向上2プラン」についての理解が深まり、実践化を図るための基盤づくりができつつある。今後、第3回の研究会（国語）で一層の定着を図りたい。



【図3】 【2プラン実践構想】



【図4】【第1回授業研究会】



【図5】 【第2回授業研究会】

2 定着確認と習熟度に応じた指導の研究(プラン1)

(1) 基本的な考え方

確かな学力の向上のためには、毎時間の学習の中で、何がわかって、何がわからないかを把握し、習熟度に応じた指導を工夫することが必要である。そのためには、小テストなどでの「確かな根拠にもとづく評価」と「評価を生かした指導」が不可欠であり、評価と指導を一体化した授業実践が必要である。

(2) 研究の内容

ア 実態調査の実施

定着確認小テストの活用は約60%、習熟度に応じた指導は約40%と、十分にできているとは言えない状況が見られた。

その主な理由は、小テストでは準備の問題、習熟度に応じた指導では個々への対応の問題などがあげられており、簡潔・適切に実施できる工夫が求められることがわかった。

イ 小学校算数での授業実践

(ア) 定着確認の工夫

授業はじめの確かめる段階と終末の確かにする段階において小テストを行い、前時や本時の学習内容を理解しているかを確実に把握するように工夫した。小テストの問題は、解法を確認することを目的とし、短時間で解ける基本的な計算問題とした。

また、授業終末で出題した問題については、家庭学習に取り入れて復習させるようにし、学習内容の定着度を自学ノートからも把握できるようにした。

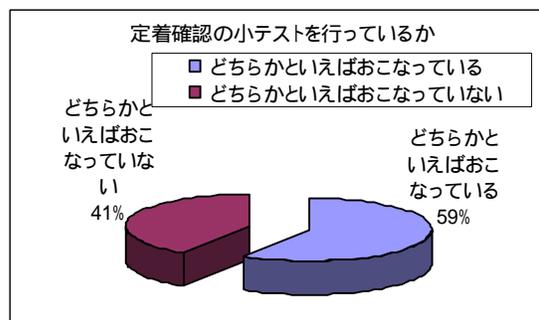
単元計画については、復習の時間を1時間設け、理解状況について単元全体をとおして確認し、補充指導が行えるように工夫した。

(イ) 習熟度に応じた指導の工夫

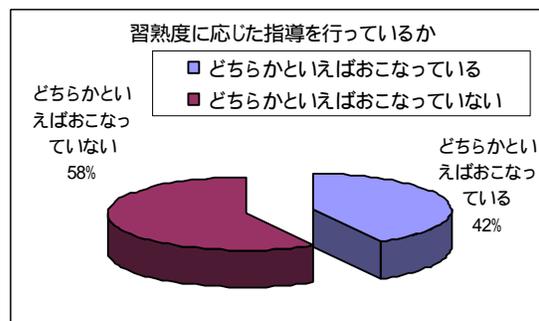
授業はじめの振り返り小テストや終末のまとめの小テストの答え合わせは、机間指導での「丸つけ法」で行い、習熟が不十分な場合は、アドバイスやヒントを与えるなどの個別指導を行った。調べる段階では、自力解決の時間を十分に確保し、解決状況に応じて、自力解決コース(個人解決の後に学び合い学習を行う) ヒントコース(ヒントカードを手がかりにして考える) 相談コース(教師と相談しながら考える)に分かれて学習をすすめる「コース別学習」を行うようにした。

(ウ) 成果と課題

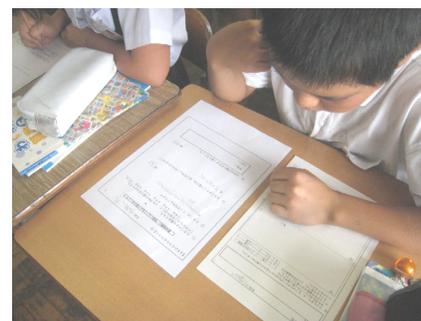
「かどがわ5段階授業モデル」にしたがって授業を展開し、2回の小テストを行うことにより、一人一人の理解度をしっかり把握し、学習内容の定着を図ることができた。



【図6】 【小テストの活用実態】



【図7】 【習熟度に応じた指導実態】



【図8】 【小テストに取り組む児童】

また、習熟度に応じた「コース別学習」を組み込むことにより、一人一人の力にあった学習方法を選択することができ、意欲的に学習を進めることができた。

「授業」「個別指導」「家庭学習」「朝の学習タイム」という「学びのサイクル」を構築することにより、学校・家庭での学習に連続性をもたせ、理解・定着を図ることができた。

課題としては、2回の小テストを行う時間を確保するための工夫や小テストの問題数、難易度の再検討等の工夫が必要である。また、補充指導のための「丸つけ法」など机間指導に関する指導技術を磨くことや発問の吟味・精選も行う必要がある。「コース別学習」に関しては、教師の関わり方や各コースの学習状況の把握の工夫も必要である。さらに、算数での指導をもとに、他教科における定着確認と習熟度に応じた指導の在り方はどうあればよいかを、考える必要がある。

かどがわ5段階授業モデル(算数・数学編)		小テストなどで学習の定着を確認しながら、一人一人の学力を保证する授業プランです。
確かめる(5分)	1 前時学習の定着を確認する 振り返り小テストをする 答え合わせをする(必要に応じて) 重要事項を確認する	小テスト ・前時末の問題から1-2問 机間指導 ・声をかけながら丸をつける ・本時前提内容を確認(重要事項再確認)
つかむ(5分)	2 本時学習について話し合う 問題の意味をつかむ ・全体読み・一人で読み 答えを予想する ・自分の言葉で表現する 本時学習のめあてをつかむ	机間指導 ・緑引き・抜き出しをチェックする ・答えの予想を確認する (自分なりの予想を持つことができたか) ・めあてをつかむことができたか確認 (問題と関連させ理解できたか)
調べる(20分)	3 問題を解決する 自力解決(5分) *自分の答えをもたせる *遅れている時は個別指導をする コース別学習(5分) *相談コース(教師と一緒に) *自力コース(学び合いで) 集団解決(10分) ・意見を出しあい検討する *よさを評価する ・答えを見つける ・説明できる(達成の評価) *自分の言葉で説明できる	机間指導 ・自分なりの答えを持ってたかを確認する ・理解度に応じてコースをわける ・相談コースを中心に指導する (自力コースは学び合い学習) 全体指導 ・意見をもつことができたかを確認する ・意見を比較・確認する (よさを見つけて話し合う) *説明することができる *質問することができる *意見を言うことができる *比較検討することができる
まとめ(中小108分)	4 本時学習をまとめる ・問題に対する答えを一般化する ・子どもの言葉で要点をまとめる(評価) ・重要事項を確認する めあてを振り返り、学習をまとめる	机間指導 *文庫に書くことができる *自分の言葉で言える *友達に説明することができる *キーワードを使うことができる
確かにする(中小107分)	5 本時学習の定着を図る 小テスト → 評価 → 補充指導 → 家庭学習課題 評価 → 発展指導	小テスト ・基本問題2問 発展問題1問 (基本問題クリアを目指す) ・補充指導(教師の指導) ・発展学習(学び合い) ・次時小テストを予告する ・家庭での再学習を指導する
かどがわ 学びのサイクル		授業 個別指導 家庭学習 ドリル学習

【図9】【かどがわ5段階授業モデル(算数・数学編)】

ウ 中学校社会での実践

(ア) 定着確認の工夫

3年社会の「地方政治と自治」で検証授業を行った。「かどがわ5段階授業モデル」を基本として指導を展開する中で、「確かめる段階」と「確かにする段階」において小テストを行い、本時や前時の学習内容を十分に理解できているかを把握した。

まず、「確かめる段階」における小テストでは、前時の終末に行った小テストの中から2問を抜粋して5分間で解かせて採点した。また、「確かにする段階」における小テストでは、本時の知識・理解を問う問題と本時のまとめに関する思考力・判断力を問う問題を組み合わせた5問程度の小テストを10分程度で解かせて採点を行った。小テストを2回行うことで、一人一人の定着度を確実に把握することができた。

(イ) 習熟度に応じた指導の工夫

授業中に行った2回の小テストの結果が思わしくなかった場合は、授業中での個別指導に生かしたり、空いた時間や放課後等に個別指導に補充指導を行うなど、少人数ならではの継続



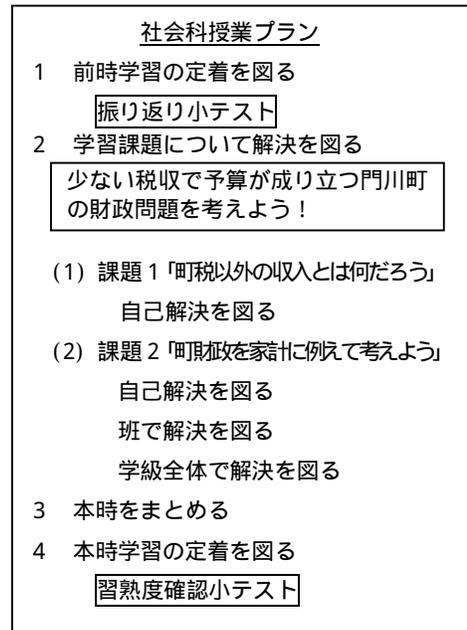
【図10】【小テストに取り組む生徒】

した指導を行い、次の単元に向かわせることができた。また、「調べる・追求する段階」において、学習課題について自己解決を図る活動の際は、必ず机間指導をしながら習熟度に応じて支援・指導を行い、グループや学級全体の活動や話し合いの場において、自分の考えや意見をもって参加する自信を持たせることができた。

(ウ) 成果と課題

授業はじめと授業終末の小テストを指導過程に位置づけることにより、確かな根拠にもとづいて一人一人の学習定着度を把握することができた。また、小テストを少ない問題数で高得点にチャレンジできる絶好の機会と期待するなど、社会科の授業への意欲づけに結びつくことも実証できた。また、自力解決における机間指導や集団での話し合いにゲストティーチャーを招いて議論することにより、課題追求への意欲が高まるとともに学習内容の理解が深まり、授業に対する成就感や達成感を味わわせることができた。

課題としては、2回的小テストを確実に実施するために、指導内容や配付資料及び板書事項を精選するとともに、時間配分を考えた授業を行う必要があることが明らかになった。

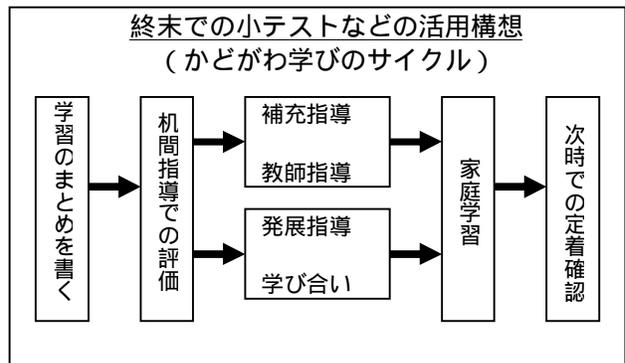


【図 11】【社会科授業プラン】

エ 小学校国語での実践

(ア) 定着確認の工夫

小学6年「海のいのち」で検証授業をおこなう計画を立てている。(3学期)「確かめる段階」では、前時に学習した内容について振り返り小テストを実施して定着確認を行い、本時学習の意欲づけを行う。問題は国語の特性をふまえて、重要語句に着目した問題と登場人物の心情を問う問題とし、本時授業に生かすようにする。授業終末の小テストでは、本時の「情景や登場人物の言葉を問う問題」や「登場人物に対してかける言葉を考える問題」として、定着状況に応じた指導ができるように工夫したい。



【図 12】 【終末での小テストなどの活用構想】

(イ) 習熟度に応じた指導の工夫

国語における習熟度に応じた指導とは、思考の広がりを助けることだと考えられる。そこで、今回は、効果的な机間指導の在り方とお互いの意見を磨き合ってより深い読みへとつながるグループ学習の在り方について工夫したい。机間指導では、発表や観察、ワークシート等から、支援が必要な児童をピックアップし、重点的に支援をしていく。グループ学習では、班編制を習熟度の違う児童同士で行い、意見の交流から磨き合う場を設定する。また、学習の足跡を掲示して班の話し合いに活用できるようにし、習熟度に応じた指導ができるように工夫したい。

(3) 研究の振り返り

このような実践研究をとおして、小テストなどを生かした「確かな根拠にもとづく評価」とそれをもとにした「習熟度に応じた指導」の効果が確認されたが、教科によりどのような定着確認の工夫をする必要があるか、習熟度に応じた指導をどのように工夫する必要があるかを、さらに研究して明確にする必要がある。

3 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究(プラン2)

(1) 基本的な考え方

ドリル学習を確実に実施すること、効果的な指導法を工夫することが「プラン2」のねらいである。そのために、昨年度作成した「ドリル学習の手引き」を参考にして、学校や家庭への啓発に取り組んだ。

(2) 研究の内容

ア 実態調査の実施

教職員を対象にして、

ドリル学習の時間を設けているか。

ドリル学習はいつ実施しているか。

1週間に何回実施しているか。

どのような工夫をしているか。

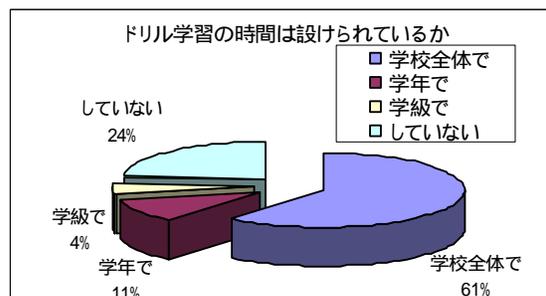
などについての実態調査を行った。

その結果、学校全体で取り組んでいるのが約60%、朝の時間が約80%、週に2～3回実施が約54%などの実態がわかったが、「実施していない」や「効果的な取組ができていない」ことなども明らかになった。

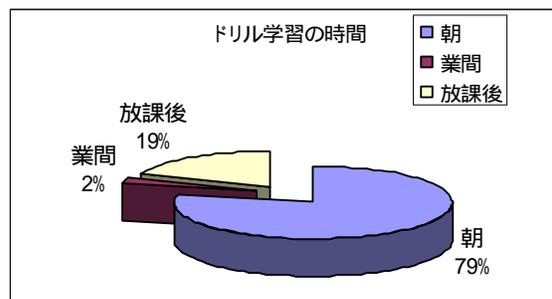
イ ドリル学習時間の確保(A校の例)

ドリル学習(スキルトレーニング学習)は、年度はじめから校時程に位置づけて実施している。実施時間の確保のため、各学年の係の生徒には、手際よく問題を配付し、時間通りに問題(5・6問程度)に取り組むように指導した。

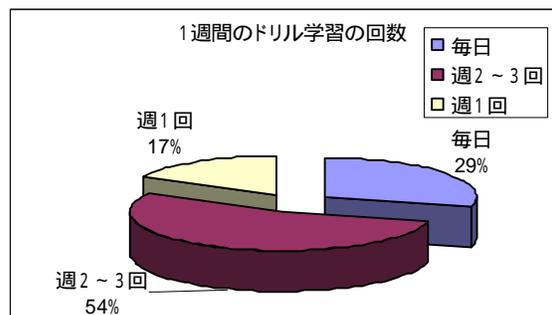
テスト中は、学級担任が机間指導を行い、ほとんどの生徒が時間内に最後まで問題に取り組めるようになった。自己採点后、学級担任が回収して教科担任に渡し結果が伸び悩んでいる生徒については、休み時間や放課後等の時間を活用して、個別指導を行うようになっている。また、成績が伸びている生徒には、賞賛を行うとともに、次の目標を立てさせるなど、激励してさらに力を伸ばすように工夫している。



【図13】 【ドリル学習の取組】



【図14】 【ドリル学習の時間】



【図15】 【ドリル学習の回数】

スキトレ学習時間の流れ	
15:05～15:55	6校時
15:59～16:00	プリント配布
16:00～16:03	スキトレ学習
16:03～16:04	解答配布
16:04～16:05	自己採点
16:05～16:20	帰りの会
事後処理の流れ	
採点	自己採点・記録
回収	係が教科担任へ

【図16】 【スキルトレーニング学習の流れ】

ウ ドリル学習の進め方(B校の例)

ドリル学習とは、「基本的な知識や技術を反復練習することによって、定着・強化する」ことである。少しずつでも、できるだけ毎日続けることが、基礎となる力を定着させる上で大切となる。

このドリル学習（音声練習法）の特徴は、クリアファイルに入れた計算プリントを使うことで、繰り返し使えること、計算カードの問題文を見て、答えを口頭で言うだけで計算力が伸びること、ペア学習で行うことである。

毎朝、8時25分から約8分間ドリル学習の時間を確保している。図17を使って、当番児童が進めている。隣り合うペアで、一人が答えの書いてあるプリントを見ながら答え合わせをしていく。相手の答えが間違っていた時は、ストップをかけて言い直しをさせる。朝の自習時間にドリル学習が進められるようにシステム化し、毎日の日課としている。担任は、結果の記録で児童の伸びを見逃さず誉め、合格シールを貼るなどの意欲づけもしている。

エ ドリル学習の計画と進め方の工夫(C校の例)

1週間の朝自習時間の内容を設定して、8:10～8:20の間に取り組んでいる。内容は、学校の課題をふまえて、月曜日が漢字ドリル、水曜日が計算ドリル、木曜日が読解ドリルとしている。今年度は、ドリル学習の充実の観点から、3年以上は、「ドリル学習の進め方」と「漢字・計算ドリル用プリント」を用いて、児童だけでもドリル学習に取り組めるように工夫した。このような工夫により、児童は朝自習の流れを理解して短い時間でも集中して取り組めるようになった。また、ドリル学習の結果を生かして、習熟度に応じた学習が実践できるようになった。

(3) 研究の振り返り

ドリル学習の啓発と推進といった、実践化をめざして取り組んできた「プラン2」の研究・実践により、これまで未実施であった学校においても取組が始まったり、学校ぐるみで効果的なドリル学習に取り組むようになってきたりするなど、いくつかの成果をあげることができた。

今後は、すべての学校で実践できる「かどがわドリル学習プラン」などを作成して、どこの学校でも同じスタンスでドリル学習に取り組むことができるように、さらに啓発・実践化に努めていく必要がある。

っ子タイムのすすめかた	
今から っ子タイムをはじめます。 お願いします。(お願いします。)	
今日は(国語の 算数の)コースをやります。 まず、一人で練習します。時間は1分です。(はい)	
用意 スタート。1分…やめてください はじめに廊下側の人が答えます。(はい)	
用意 スタート。1分…やめてください 次に、ベランダ側の人が答えます。(はい)	
用意 スタート。1分…やめてください 確認してください。(はい)	
これで っ子タイムを終わります。 ありがとうございました。(ありがとうございました。)	
基本ルール	
日直が前に出て太文字の部分を大きな声で言う。 ()の部分はみんなが大きな声で言う。 関係ない人は音をださない、みんなの時間の尊重	
答えを言う人 相手にきちんと伝えるははっきりとした声で言う。 式(漢字)を見たらとにかく早く言う。	答え合わせをする人 相手の声をしっかり聞いて、聞かれた時と間違った時は「ストップ!」前より伸びている時はほめる、伸びていない時は励ます。

【図17】【ドリル学習の進め方】

朝自習(ドリル)タイムの進め方
今から朝自習をはじめます。 お願いします。(お願いします。)
今日は、 <u>漢字ドリル</u> の 番をします。準備をしてください。 <u>計算ドリル</u>
係はプリントを配る。他の人はドリルや筆記用具を準備する。 全員が準備できたのを確認して いうつる。
時間は(8:07)～(8:17)の(10)分間です。 用意、スタート。
ちゃんとしていない人がいたら注意する。 どうしても言うことを聞かない人がいたら後で先生に報告する。 えんぴつを置いてください。 赤ペンを出して解答してください。 まちがったところやりなおしましょう。 8:17～8:22の間に解答や、やり直しをする。 後ろの人はプリントを集めてきてください。 これで朝自習を終わります。 次は朝の会です。日直さんお願いします。

【図18】【ドリル学習の進め方】

成果と課題

1 研究成果

(1) 学校や関係組織との連携

「学力向上2プラン」を実践するための体制をつくり、実践化に取り組むことができた。

授業研究会や情報発信をとおして、研究を普及、啓発することができた。

(2) 定着確認と習熟度に応じた指導の研究 (プラン1)

国語・社会・算数(数学)に対応する「かどがわ5段階授業プラン」に基づいた授業実践を行い、多くの教職員に研修の機会を提供することができた。(国語は2月実施)

小テストなどでの「確かな根拠に基づく」定着確認と習熟度に応じた指導への理解が深まり、実践化が図られつつある。

研究の成果を「教育研修資料」として毎月発行し、各学校へ情報提供することができた。

(3) 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究 (プラン2)

研究会や教育研修資料などでの研修・啓発により、ドリル学習の確実な実施と効果的な指導への理解が深まり、ドリル学習が充実しつつある。

研究の成果を教育研究所便り「ふれあい」により、家庭に情報発信することができた。

2 今後の課題

(1) 学校や関係組織との連携

学校や関係組織との連携・実践を一層推進する必要がある。

(2) 定着確認と習熟度に応じた指導の研究 (プラン1)

「かどがわ5段階授業プラン」を、日常の標準授業プランとして定着させるための啓発と実践に今後も取り組む必要がある。

(3) 日常活動でのドリル学習の効果的な指導の研究 (プラン2)

効果的なドリル学習の実践について、引き続き啓発し、実践に取り組む必要がある。

すべての学校で実践できる「かどがわドリル学習プラン」などを作成して、どこの学校でも同じスタンスでドリル学習に取り組むことができるように啓発・実践化に努めていく必要がある。

参考文献

「授業改善と学力評価」

北尾倫彦著 (図書文化)

「つけ法で授業が変わる・子どもが変わる」

志水 廣著 (明治図書)

研究同人

職名	氏名	所属	職名	氏名	所属
所長	新原とも子	教育長	研究員	川崎利康	草川小学校
事務局	和泉昭子	教育総務課	研究員	吉留純子	西門川小学校
研究指導員	山本逸馬	教育総務課	研究員	三樹史朋	五十鈴小学校
研究主任	長友政文	西門川中学校	研究員	酒匂慎一郎	門川中学校
研究員	島洋一郎	門川小学校			